

his surgery, he wrote more than 100 letters to contacts around the world, with the help of his good friend, W.E. Towson, who was by his side. Despite hopes of recovery, his condition suddenly worsened, and Dr. Lambuth passed away on September 26th.

Dr. Lambuth's parents also worked in Japan after moving there from China with their son. His father, James, is buried in Kobe, but his mother, Mary, who moved back to China shortly before she died, is buried in Shanghai. Dr. Lambuth's wish was to be buried next to his mother, and this is why his grave is in Shanghai. Although he has been gone now for 90 years, his love for others, and the work he began still lives on.

(院長)

キリスト教主義に基づいて……

松 木 真 一

4月にスタートした新しい大学生活も早いもので、もう一か月半が過ぎました。新入生一人ひとりの心には、きっといろいろの思いが生じ始めていることでしょう、またこれからの大学生活や勉学について様々な願望や計画も不安と期待のうちに抱き始めていることでしょう。そうした思いや願望と絡んで、この関西学院という学校はキリスト教主義であることも授業やチャペルアワーを通して、改めてあるいは新たに認識し始めているのではないのでしょうか。「宗教運動」の機会に、こうしたキリスト教主義や建学の精神に心を向け集注してみることは、特に新入生にとって大事な、大切なことだと思っています。

関西学院の理念や教育や活動など種々の営みについて語られる時、よく見かけるのは「キリスト教主義に基づいて・・・」といった文言です。一体、どういう意味でしょうか。

この意味について思いをめぐらす時、私は個人的ですがいつも思い出すことがあります。関西学院中学部で過ごした3年間、毎日体験した礼拝です。そこ

で繰り返し読まれて、いつの間にか心に深く刻み込まれた聖書の言葉があります。―「患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出す」（ローマ5：3-4）

もちろん中学部生の私には、単純に響きの良い美しい言葉、といった程度のものでした。しかし大きくなるにつれ、いろいろの出来事や人びとと出会い、自分も変化・成長して人生経験を積み重ねていくうちに、この言葉の持つ深い意味を徐々に自覚するようになったのです。「患難」はいつかきっと「希望」に変わるのだ、と。人生のいわば根本的指針のようなものです。

この宗教運動の時節、私はこの聖句に、関西学院が建学以来立脚してきたキリスト教主義の意味する重要な一面を強く実感せざるを得ません。新入生はもとより、すべての関学生、職員教員の、というよりそもそも人間の人生には順境と逆境があります。成功、恵み、喜び、幸せは人生を豊かにしてくれます。しかし逆に、それらすべてを一瞬に破壊し、人生を虚しくつらいものに変えてしまう「患難」に遭遇することもよくあります。まさかという形で。予想を超える形で。程度の差こそあれ、人生を妨害し深く傷つけ、あるいは否定するような逆境です。問題は、その時それをどのように受けとめ、どのように乗り越えていくか、ということ！

この聖句は、時間が経てばそのうち解決する、という意味ではありません。むしろ、現実遭遇する患難、そうした患難の現実そのものを受容し支える一層の「深み」（ティリッヒ）、患難や逆境のただ中に落ちた人間の存在をより深いところから受容し支える、そうした一層深い場を暗示・示唆しているような気がします。現実の外側に何か抽象的超越的なものを求めるのでありません。悲しみと苦悩、限界と絶望の真ただ中に在る人間のいわば内なる深みに、自らの立場と視座を求める宗教的な求めとも言うべきものです。そのような深い場から、改めて自分の人生を、また現実を経験する患難や苦悩をしっかりと受けとめつつ希望へ開かれていくようと、同時にまた他者の人生と存在、特にその患難や苦悩を共に受けとめ支えあい、そこから希望に向かって共に前向きに進んでいく道を真剣に祈り求めることができるようにと強く願わざるを得ないのです。

今年の「宗教」運動がこうした宗教的な場に少しでも関心を深める機会となれば、と願っています。

（理工学部宗教主事）